

『入中論』第六発心の研究

(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D190434

氏名：掬月 玄

論文の要旨

ふりがな 氏名	きくづき ゆかし 掬月 玄
論文題目	『入中論』第六発心の研究
<p>論文の目的と方法</p> <p>中観派のチャンドラキールティ(Candrakīrti: ca. 570–640)は、『入中論』第六発心において瑜伽行派批判を行っており、「ただ認識のみがあり、外界対象は実在しない」という唯識無境を否定している。瑜伽行派は唯識無境を合理化するために、夢、幻、餓鬼等の例を用いている。これに対して、チャンドラキールティはその同じ夢、幻、餓鬼等の例を利用することで唯識無境の非合理性を指摘している。この唯識無境批判の過程で彼は夢の中の対象、幻、餓鬼の知覚対象である血膿等が認識外部の要素であるかどうかについて自身の見解を示している。すなわち、チャンドラキールティは唯識無境批判において外界世界に関する彼の理解を明らかにしている。</p> <p>本論文はこれらの夢の中の対象等といった法処色 (dharmāyatanarūpa)、幻等といった迷乱知の把握対象の顕現、業異熟(karmavipāka)の不可思議性、餓鬼等の認識に関するチャンドラキールティの見解を瑜伽行派、説一切有部、毘婆沙師、経量部等といった他学派の見解と比較、検討する。さらに、本論文はこれらの概念に関するチャンドラキールティと他学派の見解を概括している、チベット仏教ゲルク派のジャムヤンシェーパ・ガワン・ツォンドウ('Jam dbyangs bzhad pa ngag dbang brtson 'grus: 1648–1721/1722)の手になる『大中観』を参照し、チャンドラキールティによる外界世界に関する理解の特色を明らかにするものである。</p> <p>論文構成</p> <p>本論文は「序論」「第Ⅰ部・本論」「第Ⅱ部・附論」より構成される。「本論」は全四章と結論からなり、「附論」は翻訳研究からなる。</p> <p>序論では、研究の背景について説明した後に、『入中論』第六発心の瑜伽行派批判に</p>	

関する先行研究を概説し、研究の目的と方法を提示し、『入中論』第六発心の瑜伽行派批判の構成と内容を概略的に示した。

第一章法処色に関する理解

第一章「法処色に関する理解」では、『阿毘達磨俱舍論』、『瑜伽師地論』、『阿毘達磨集論』、『中観五蘊論』、『入中論』における法処色の理解をそれぞれ分析し、チャンドラキールティの理解の独自性を考察した。チャンドラキールティは『入中論』においてバーヴィヴェーカの主張を祖述する時に、夢の中の対象を法処色と見なしている。この夢の中の対象を法処色と見なすような理解は『阿毘達磨俱舍論』、『瑜伽師地論』、『阿毘達磨集論』、『中観五蘊論』には見出されない。ジャムヤンシェーパが示唆するように、チャンドラキールティは夢の中の対象だけでなく、色、形として意識だけに顕現するすべての対象を法処色として認めていると考えられる。

第二章迷乱知の把握対象の顕現に関する理解

第二章「迷乱知の把握対象の顕現に関する理解」では、『大中観』の言明を参照しながら、影像等といった迷乱知の把握対象の顕現に関して経量部、瑜伽行派、瑜伽行中観自立論証派、毘婆沙師、帰謬論証派の理解を分析し、チャンドラキールティの理解の独自性を考察した。ジャムヤンシェーパは『中観莊嚴論』と『入中論』の言明に基づき、「経量部、瑜伽行派、瑜伽行中観自立論証派は影像と心の同一性を認めるが、毘婆沙師、中観帰謬論証派はその両者の別異性を認める」と論を展開する。ジャムヤンシェーパは毘婆沙師と帰謬論証派の主張に共通性を認める。彼の分析は典拠があり、妥当性があると言える。ただし、チャンドラキールティは毘婆沙師のように影像を實在の存在要素とは捉えずに智者の観点においてはその空性を強調している点、さらにそこに因果効力を認めている点には注意すべきである。

初期経典である『相応部』では幻や影像等は実体のない事物の例として説示されていた。そして、『摂大乘論』では幻や影像等は唯識無境を合理化するための例として説示されていた。チャンドラキールティはすべての迷乱知の把握対象について非存在性を認めながら、その顕現については外界対象性を認めている。彼は初期経典の伝統的な見解を踏まえた上で、瑜伽行派の唯識無境を否定するために、このような見解に到達したと考えられる。

第三章業異熟の不可思議性

第三章「業異熟の不可思議性」では、「業異熟は不可思議である」という表現における「不可思議」(acintya, acinteyya, bsam gyis mi khyab)という語の意味と、そもそも何故業異熟が不可思議であるのかという理由について考察した。『増支部』では「業異熟は思議されるにふさわしくない(不可思議である)。なぜなら、思議しようと試みた者に苦悩と狂気が生じるから」と説かれていた。『阿毘達磨集論』では「業異熟は不可思議である」という表現は「業異熟は思議され得ない。なぜなら、一切智者以外の者たちは思議できないから」や「業異熟は思議されるべきではない。なぜなら、思議しよう

と試みた者に狂気等といった過失が生じるから」という意味で解釈されていた。『顕揚聖教論』においても『阿毘達磨集論』と本質的には同様のことが説かれている。

瑜伽行派の見解とは異なり、『入中論』では「業異熟は思議されるべきではない。なぜなら、世俗が崩壊してしまうから」と説かれている。ここでの世俗の崩壊とは善因楽果、悪因苦果の原則自体の崩壊、およびそのような原則に基づいた慣習の崩壊のことである。このような崩壊を招くのは業異熟に関する適切な範囲を超えた思議が原理的に不可能であり、論理的な破綻を引き起こすからである。業異熟に関する思議は能力的に不可能だと瑜伽行派が考えるのに対し、業異熟に関する適切な範囲を超えた思議がそもそも原理的に不可能だとチャンドラキールティは考えており、この点が瑜伽行派とチャンドラキールティの見解の根本的な差異である。第三章では、業異熟等といった世俗について熟知しない限りは、修行者が適切な範囲を超えた思議を行ってしまう可能性があるため不注意に思議を行ってはならないというチャンドラキールティの考えを明らかにした。

第四章 餓鬼等の認識

第四章「餓鬼等の認識」では、『摂大乘論』、『入中論』、無上瑜伽タントラの文献における所謂「一水四見」の例で示されるような認識内容の多様性を取り上げながら、それぞれの世界観について分析し、チャンドラキールティの理解の独自性を考察した。アサンガは『摂大乘論』において、同一対象に対する認識内容が天、人、餓鬼等の間で異なることを根拠に外界対象の非実在性を説明している。一方、チャンドラキールティは『入中論』において、餓鬼の知の場合であろうと、人の知の場合であろうと、認識が外界対象に依存して起こることを説明する。『ヴィマラプラバー』等といった無上瑜伽タントラの文献では餓鬼の知覚対象や人の知覚対象等からなる外界世界が描かれている。

認識内容は人、餓鬼等といった個体存在によって異なり多様である。瑜伽行派は認識にのみ実在性を認めているため、そのような認識内容の多様性は認識内部に起因していると考えられる。一方で、チャンドラキールティは勝義の場合を除いて認識にも外界対象にも実在性を認めているため、そのような認識内容の多様性は外界対象に起因していると考えられる。彼は外界において人が認識する世界も餓鬼等が認識する世界も併存するという多元的世界を認めている。多元的世界についてチャンドラキールティは承認しているもののそれに関する具体的な説明をしておらず、そのような説明がなされるのは『ヴィマラプラバー』を待たねばならない。

結論

チャンドラキールティは認識が起こるには必ずそれに対応する認識外部の対象がなければならないと考えていたため、瑜伽行派の唯識無境を批判している。瑜伽行派は唯識無境の合理性を示すために夢や幻の例、天や餓鬼の例を用いている。チャンドラキールティはそれらの例を利用することで唯識無境の非合理性を指摘している。すなわち、彼

は夢の中の対象も、幻等といった顕現も、餓鬼が認識する血膿等も認識外部の要素と認めており、これらを対象とする認識が起こるには認識外部の対象がなければならないことを示している。

チャンドラキールティは『入中論』において唯識無境批判の末に天界、餓鬼界等からなる多元的な外界世界を承認しており、人が認識できない複数の外界世界を受け入れている。チャンドラキールティより後世のインド中観派について語ると、シャーンタラクシタやカマラシーラ等は唯識無境等といった瑜伽行派の定説を世俗として受容しながら中観思想を展開しているため、このような外界世界は受け入れ難いものであったろう。これに対して、このような外界世界は『入中論』より後代の『ヴィマラプラバー』において明確に描写されている。『入中論』と世界観の共通点が見出されるのは彼より後世のインド中観派の文献よりは寧ろ『ヴィマラプラバー』等といったインド密教末期の無上瑜伽タントラ文献である。ジャムヤンシェーパは『大中観』において『入中論』と『ヴィマラプラバー』を紐付けながら多元的な外界世界を記述している。このような記述が可能なのはそもそも『入中論』と『ヴィマラプラバー』の世界観の間に親和性があることが一因であろう。本研究は『ヴィマラプラバー』と共通点が見出される『入中論』の多元的な世界を明らかにした。

附論

附論では、チャンドラキールティ著作の『入中論』第六発心の中でも瑜伽行派批判に関するテキストと翻訳を提示した。